

第12分科会「里山と生物ビオトープ」

シンポジウム「ビオトープとしての里山保全」

日 時：2006年5月20日（土）10:00～12:00

場 所：八千代市市民会館 第1会議室

参加者：47名



趣 旨

第1回里山シンポジウムで、生物・ビオトープ分科会は、人が適度に手を加えること（稲作や山の手入れなど）によって、生物多様性が維持されている「里山の自然」についてデータをあげて学術的に評価した。

第2回目はNPOによって維持・管理され、いきものの宝庫である千葉市緑区下大和田谷津田・里山にでかけ、観察会や生き物調査をすることによって生物多様性を体験した。また、谷津田・里山がこどもたちにとって安全で楽しく遊べる場であることを、実際に活動しているこどもたちが考えた遊びを通して体験した。

こうした中、県内各地で谷津田・里山保全意識が高まるにつれ、生きものの生息空間としてとらえて保全していこうとする活動も活発になってきた。今回は市民だけでなく、行政、学校そして農業者などが協力することにより、永続的な保全が可能になった事例を取りあげ発表した。これらの実践例を参考に、今後県内の谷津田・里山の保全のあり方を考えていく。

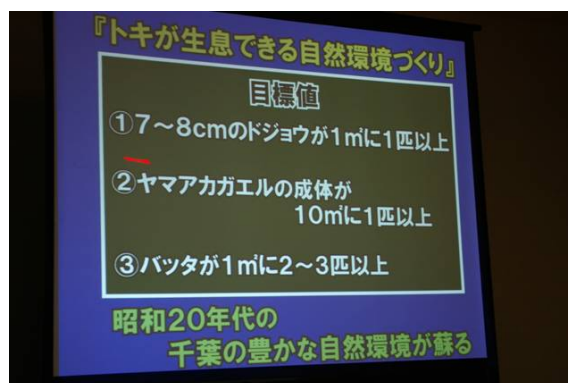
内 容

1. 農業土木部の谷津田物語 ～健全でより豊かな谷津田を目指して～

渡辺 英二（千葉県立茂原樟陽高等学校 農業土木部顧問）

農業土木部の生徒と、明るい里山づくりを目指す地権者とが連携し、30年以上放棄されていた谷津田を再生している。生きものの生息場所の復元を念頭に、昔ながらの方法により谷津田の水田・農道・水路・ため池等を復元・創出している。また、水田での稲作、生きもの調査、測量等を実施している。

こうした取り組みの結果、今では「日本の里地・里山30」に選ばれるほどに再生し、ビオたんぼ計画や、トキが住めるたんぼ作りを生徒と一緒にいき、佐渡までトキを見に行くなど、意欲的に活動している。



2. 「ニホンアカガエルとの出会い」が、いま仲間と共に谷津の保全活動へ！

阿部 さと子（谷津学校OB）

岡発戸・都部の谷津は我孫子に残る谷津で最も大きく、中流部から上流部になる岡発戸谷津は区画整理事業の手から免れ、今も自然豊かな環境が残っている。しかしここも1980年頃から休耕田が増え、ヨシ・ガマ・セイタカアワダチソウに覆われてきた。阿部氏は2000年の夏から岡発戸の谷津で小さな水辺を作りはじめた。翌春、その水辺にニホンアカガエルの卵塊を1つ見つけた時の喜びが、今の仲間との谷津の保全活動へと繋がっている。

地道な活動により、今年はニホンアカガエルの卵塊が224個確認できた。これからも行政、市民が協力し、保全活動を継続していきたいこと等を発表した。



3. 野田市江川谷津の大規模水田ビオトープ計画

新保 國弘（東葛自然と文化研究所）

野田市の江川地区には、オオタカとサシバが田んぼを挟んで両側の斜面林に巣をつくり子育てしている約100haの谷津空間がある。江川谷津は昔、奥行き約8kmあったが、現在は奥行き約1.8km、幅250mの下流部分のみとなつてしまった。

一時、土地区画整理事業が進んでいたがオオタカとサシバの繁殖確認と民事再生法申請で頓挫。放置しままでは産廃置場等になるおそれがあることから、市はその貴重な自然を残し活用しようと、農業生産法人などによる自然農法ブランド米の生産エリア(33.2ha)、水田型市民農園(9.3ha)、オオタカ・サシバのための水田ビオトープ保全管理エリア(21.5ha)、斜面林保全エリア(25.5ha)などの土地利用ゾーニング案からなる面積約90haの「里山ミュージアム基本計画」を平成18年2月に記者発表、3月議会に予算を計上した。



まとめ

谷津田や里山では、草刈りや水路の手入れなど人の手が適度に加わることで、豊かな生態系が創出されることが確認された。また、専門性を持った市民による調査や保全活動をふまえて、生物多様性を維持のための具体的政策提案の可能性も示された。

今後は、市民や学生による地道な調査を積み重ねることで、地域の特性を評価し、施策に反映させていくことが肝要である。